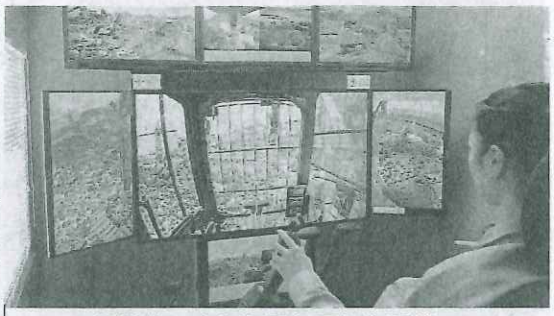
日本経済新聞　2025年（令和7年）9月19日（金曜日）

建物解体に遠隔操作重機

三同建設、専門業者で全国初

解体業を手掛ける三同建設（大阪市）は遠隔操作できる重機を導入した。建設現場に建てたプレハブの中の操縦席からショベルカーを操作する。遠隔重機の導入は解体専門業者としては全国初の取り組みとなる。来年には本社から遠隔操作できるようにする。働き方の選択肢を増やし採用にもつなげる。



操縦席の中から見た景色や重機の外観が映し出されている

来年にも本社に操縦席

9月上旬の大阪市大正区の工場跡地では、先端が動物のあごのようになったショベルカーがコンクリートのがれきを砕いていた。運転席には誰も乗っていない。これを操縦しているのは、同じ敷地内のプレハブにいる女性社員だ。

三同建設が導入したのは、コベルコ建機の遠隔操作システム「K-DIVE」。ショベルカーには複数のカメラが搭載されており、操縦席の前にある7つのモニターに周囲の映像が映るようになっている。プレハブの操縦席の前にあるのは実際の建機のコントローラーと同じものだ。座席も重機の傾きにあわせて全方向に傾く。

三同建設にとって、現場に建てたプレハブ内から操作する現状の仕組みは導入の第1段階だ。第2段階として来年にも操縦席を大阪市にある本社に移し工事現場と衛星通信でつなげる。K-DIVEに対応した重機を追加購入し、離れた2つの現場の重機を本社の1つの操縦席から動かす。内勤者50人程度のうち15人程度が運用を担当すると想定している。これまで重機の操縦は男性が担うことが多かったが、女性や身体障害者による運用も視野に入れている。

遠隔重機導入の1つ目の狙いは現場で重機を操作する人員を減らすことだ。重機を操縦できる現場作業員は高齢化が進む。三同建設のグループ会社でも若手の新規採用ができていない状況だ。

2つ目の狙いは職務の選択肢を広げて従業員の満足度を高めることだ。三同建設の社員は解体現場の解体を担う施工管理者と、営業や経理といった本社勤務の社員に分けられる。本社にいながら遠隔で重機を動かす仕事はこれらとは違った面白みがあり、従業員にとって魅力になりうると三同建設は考えている。就活でも重機の操作を体験してもらうなどアピールに活用する予定だ。

三同建設の窪田良章取締役は「土木や建築で大手ゼネコンによる新技術の導入が進むが、解体業も変化が必要だ」と話す。